

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月10日現在

機関番号：44701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20500680

研究課題名（和文） 紀南の民家の特性と変容に関する住生活的研究

研究課題名（英文） Characteristic Features and Transformation of Folk Houses in Southern Kishu

研究代表者

千森 督子 (CHIMORI TOKUKO)

和歌山信愛女子短期大学・教授

研究者番号：40290449

研究成果の概要（和文）：目的(1)「主屋の平面構成を通して住生活の特性と変容を明らかにする」は、今まで明確にされていなかった地域独特の平面型も含め、複数の型の分布を把握し、住生活を含めた地域特性、変容を捉えることができた。目的(2)「自然風土条件でも台風や横殴りに降る風雨から家屋を守るための建物の特性と変容を明らかにする」では、雨除け板や石垣、生垣などの地域独特の防風雨対策や屋敷構えと家屋との関係性を掌握し、変容を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Resume of research results: Two objectives were achieved: The first was to ascertain the distribution of several types of house floor plans, including some unique to the area that were heretofore unknown, in order to elucidate the characteristic features of and changes in household life. The second was to gain a grasp of the relationship between ground plans and houses in order to elucidate the special features and transformation of the area's unique ground plans, such as windbreaks, stone fences, and hedges, that are designed to protect houses against typhoons and violent rainstorms.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：住生活、民家

1. 研究開始当初の背景

民家は気候風土、生業、社会条件、材料、生活や文化等の諸条件との関わりのなかで歴史的に造りあげられてきたために、建物やその中で営まれる生活の仕方が地域で異なり、地方性が存在する。

紀伊半島南部の民家は比較的論じられる

ことが少なかったが、平面構成と外観に目立った地域特性をもつ。住まい方と深く関わる平面構成では、和歌山県北部(紀北)や中部(紀中)と南部(紀南)では様相が異なる。とりわけ、土間や炊事場に違いがみられ、紀南では通り土間形式でも奥土間幅が狭く、竈が土間ではなく、床上と土間境に据えられている

平面構成が確認された。また、平面構成には複数の型が存在する。奥土間のない前土間型もあり、家族生活の中心となる部屋(呼称はダイドコロではなくカッテ)には、竈や流しが据えられ、用途も食事・団欒・日常的接客に炊事が加わり、機能面でも紀北や紀中とは異なる様相が窺える。

他方、外観上の特性としては、紀伊半島特有の自然風土条件との関わりが指摘される。台風常襲地域であり、さらに紀伊山地は多雨地域である。家屋や住生活を風雨から守るために、屋敷構えや家屋形態に特性がみられ、軒先や開口部に様々な防風雨装置が施設されている。

これらの紀南の民家に関する研究成果は、市町村誌を含む書籍や論文にも取り上げられているが、生活的に捉えたものは少ない。一方、拙稿(「紀州民家の地方性と近代化に伴う変容に関する生活史的研究」、「紀南の民家の地方性と近代化過程に関する生活史的研究—熊野型民家の平面構成の特性と変遷—」、「紀州民家の防風雨装置及び屋敷構えの特性と変容」など)では、平面構成、外観共に紀伊半島南西部から新宮市、田辺市本宮町、東牟婁郡北山村などの紀伊山地中央部に至る地域の研究成果が手薄であり、さらに紀伊半島を広域的に捉える研究を展開する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、紀南の民家の特性と変容を住生活的視点から捉えることを目的とし、(1)主屋の平面構成を通して住生活の特性と変容を明らかにする、(2)自然風土条件でも台風や横殴りに降る風雨から家屋を守るための建物の特性と変容を明らかにする、の2つから成る。

研究内容は、(1)は祖型となる平面構成や住まい方を明らかにし、分布域を掌握する。さらに、型や住生活の変容を竈や流しの炊事設備の位置や形態の変遷に着目しながら明らかにする、(2)では、屋敷構え、家屋形態、防風雨装置などについて捉える、である。

3. 研究の方法

研究方法としては、(1)家屋の観察調査と実測調査(配置図や平面図、断面図、立面図を採取)から検討する方法、(2)居住者を対象とした面接方式の聞き取り調査により住生活や家屋に関する内容を捉える方法、(3)文献により地域の自然風土条件、建物の特性などを考察する方法、の3手法を併用する。

なお、当初は和歌山県南部の紀南のみを対象地域としていたが、紀伊半島南西部の和歌山県東牟婁郡から取り組んだ調査対象地域は、最終年には紀伊半島東部の南三重の志摩市まで及んだ(図1)。



図1 対象地域

4. 研究成果

(1) 主屋の平面構成の特性と変容

① 基本の平面構成と住まい方の特性

大半が平入り形式であるが、妻入り形式も和歌山県東牟婁郡北山村や三重県熊野市などで少数みられる。平面構成は、無土間型も一部地域で見られるが、大半は土間と床部分から成る。土間形態は、通り土間型、前土間型(踏み込み土間型を含む)、L型土間型、通路L型土間型と4つの型に分かれる。

土間と床部分の間取り形式を一体として捉えると、主屋の平面構成は、I~Xの大きく10型に分類できる。Iは無土間型、IIは通り土間型、III~VIIIは前土間型、IXはL型土間型、Xは通路L型土間型である(図2)。

これらの型の分布には、地域特性がみられる。まず、Iの無土間型は熊野市紀和町小船のみで確認された。通り土間のII型は、調査地域の南西部の比較的平野部で稲作農耕が行われている東牟婁郡古座川町、新宮市木の川に分布し、とりわけ木の川に集中している。II(4)型は古座川町でのみ1例みられた。III型の並列型は、古座川町と那智勝浦町、田辺市本宮町、三重県度会郡大紀町に分布しているが、とりわけ、中央列が前後2室に分割された、III(2)型は本宮町に集中している。IV型は熊野市紀和町と育成町の限られた地域で見られる。V(1)型は、田辺市本宮町と北牟婁郡、度会郡、志摩市、伊勢市を除く地域に分布し、とりわけ東牟婁郡古座川町と北山村で多くみられる。V(2)型は田辺市本宮町と志摩市、伊勢市を除く広域で確認される。VI型は、新宮市と北山村で主にみられる。III(2)型に類似したIX型は、田辺市本宮町と新宮市熊野川町に分布している。X型は、北山村でのみみられる。

限られた地域に分布するI型とIII(2)型、III(3)型、VI型は、明確にされていなかった型である。一方、広域的に分布しているのはV型である。

VII(1)型と(2)型は志摩市に集中している。また、その北部の伊勢市横輪町では、志摩市とは異なる独自の平面構成のVIII型が分布している。そのために、南三重でも南西部の南牟婁郡や熊野市の東紀州は和歌山県の影響を受けた平面構成が主流であるが、東端の志摩地方では独特の平面構成が確立され、その中間域は両地域の平面構成が混在している。

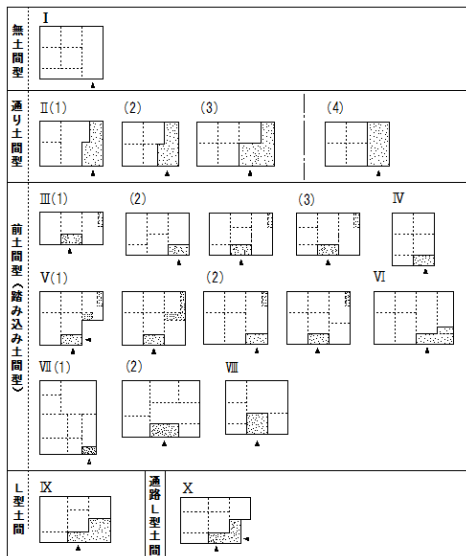


図2 平面型分類図

これらの型で展開されてきた住まい方を、最も広域的に分布している、主要な型であるV(2)型と、志摩市周辺で分布するVII(1)型とVII(2)型について取り上げる。ここでは、接客、儀式、炊事、食事、団欒、就寝、収納の生活行為と各室の関係性に注目してみる。

2列並びの居室の下手にカッテが前後に張り出す特性をもつV(2)型は、図3のように2つの住まい方がある。後列上手隅の室名に違いがみられるように、居室の用い方が異なる。就寝に用いるのと穀物などの収納に用いる違いである。前者はコタツノマと呼ばれている独立した団欒の場が確保できるが、後者はカッテが団欒の機能をも兼ねる。

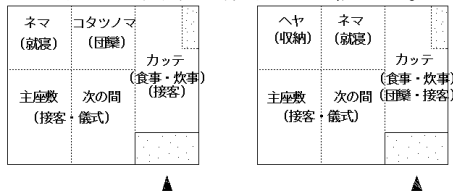


図3 V(2)型の各室の呼称と住まい方

一方、志摩市周辺で分布しているVII(1)型とVII(2)型は、その他の型とは全く異なる居室の並び方である。しかしながら団欒の場に和歌山県北部や中部と同じダイドコロの呼称が用いられている点に注目したい(図4)。

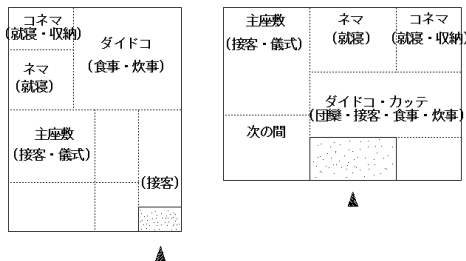


図4 VII(1)型とVII(2)型の各室の呼称と住まい方

各型での住まい方で特筆すべきは、炊事場の構成、竈と流しの位置である。

竈と流しの位置関係の組合せは、「竈が土間・流しも土間」、「竈が床上境・流しが土間」、「竈が床上境・流しが床上」、「竈が床上・流しが土間」、「竈が床上・流しも床上」の5種類ある。復元の状態では、「竈が床上境・流しが土間」が一番多く、次が「竈が床上・流しも床上」である。

「竈が床上境・流しが土間」の位置関係は、古座川町、新宮市木の川、本宮町、熊野市育成町などでみられる。竈の焚口は床上側にあるので床に座って焚くために、炊事を土間と床上の両方で行う(図5左)。

②平面構成と住まい方の変容

生活の近代化に伴い、大半の調査家屋では何らかの変遷がみられる。

離農や生活改善の影響を受け、炊事場の床上化が進行し、竈と流しの位置は「竈が床上・流しも床上」が主流になっていく。また、炊事設備も変化し、水道の普及、プロパンガス化が行われていく。竈は昭和30年代からプロパンガスに替わり始め、現在では大半の家屋で撤去され、残されている場合でも日常的には用いられていない。

平面構成も変容している。その要因は、1)土間の床上化、2)下手方向への増築、3)衛生空間の主屋内化、4)カッテの分化・拡大、5)廊下の導入である。

1)土間の床上化

通り土間、前土間、L型土間、通路L型土間のいずれでも土間が縮小し、前土間や踏み込み土間に変化している。変容時期は各家で異なるが、昭和40年代頃から進行していく。

その要因として、「土間炊事場の床上化」、「土間に玄関や応接間、衛生空間を増設する」、「土間を床上化し廊下とする」があげられる。最も多い、「土間炊事場の床上化」では、椅子とテーブルを置いた、現代風のダイニングキッチンに変容している(図5右)。

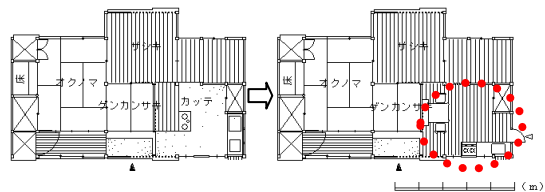


図5 IX型変形の土間床上化(本宮町 昭和60年)

2)下手方向への増築

主屋の下手方向へ炊事場を拡大したり、衛生空間の新設が行われることで、平面構成が変容している。

紀伊山地の民家は、一般的に敷地の奥行きが浅く、家屋は梁行きではなく、桁行き方向に増築されていく(図6)。

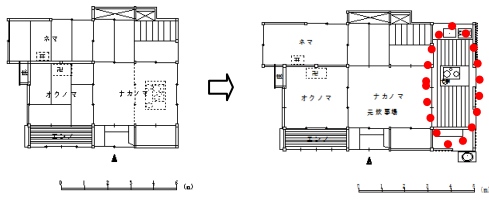


図6 V(2)型変形炊事場増築(北山村 昭和47年)

3) 衛生空間の主屋内化

主屋と離れて別棟で配されていた衛生空間を主屋に取り込む変容がみられる(図7)。主屋外は夜間や冬季に使いにくく、高齢者宅では、とりわけ改造が推進される。

4) カッテの分化・拡大

カッテでは従来、食事、炊事、団欒、日常的接客行為が行われていたが、次第に機能が分化する。前面に接客空間が確立される(図7)、あるいは、下手に炊事場や食事室が設けられ、カッテには団欒の機能のみが残されるようになる。

昭和20年代半ばには、建築時から団欒の場としてのカッテが確立された平面構成がみられるようになる。

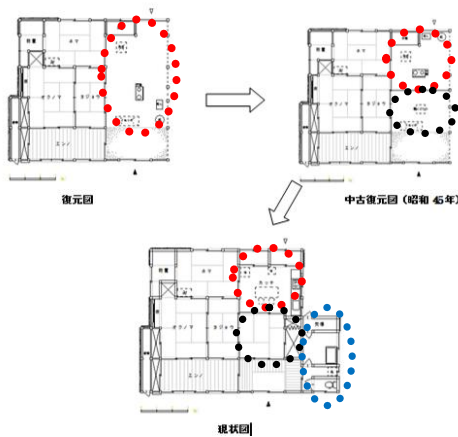
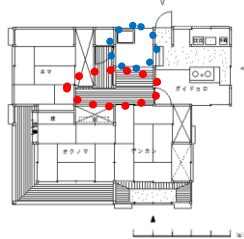


図7 V(2)型カッテ分化例(紀和町)

5) 廊下の導入

昭和30年代半ばには、従来の型を踏襲しながらも近代的な要素である廊下を取り入れた平面構成が造られていく。廊下型は中廊下型が一般的であり、図8はV(1)型が中廊下型に変容した事例である。炊事場は伝統的



(北山村 昭和35年頃築)

図8 V(1)型変形の中廊下型

な構成であるが、廊下の導入と共に後方居室の構成が変容し、浴室が取り込まれている。

一方、縦廊下型や縦中廊下型もみられる。図9はVII(2)型の縦廊下型への変容例である。入口の片側に縦に座敷を2室設け、反対側にカッテを配し、カッテ後方に居室を設ける特徴的な平面形態が踏襲されている。

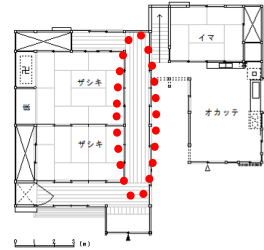


図9 VII(2)型の縦廊下型(阿児町 昭和40年築)

(2) 防風雨のための建物の特性と変容

① 屋敷構えにみる防風雨対策の特性と変容

石垣には防風雨対策としての役割があるが、多くの敷地には石垣がめぐられ、屋敷や建物を守る構成になっている(写真1、2)。

その分布は、調査対象地域の広域にわたっている。採光上の理由から前面の石垣の高さは、背面や側面よりも一般的に低い。

コンクリートブロック塀も増加しているが、既存の石垣は比較的継承されている。

一方、石垣を土台として、その上に植栽したものや、生垣の屋敷構えが紀伊山地東部の松阪市から南東部沿岸まで広域に及ぶ。

樹種は珊瑚樹等もみられるが、楨が一般的である(写真3、図10)。紀伊半島東端の志摩市阿児町国府では楨垣が発達している。集落が密集し、海岸に近いために、防風のみならず防火、防飛砂策である(写真4)。



写真1 石垣(御浜町)



写真2 石垣(横輪町)



写真3 石垣と楨垣(飯南町)



写真4 楨垣(阿児町)

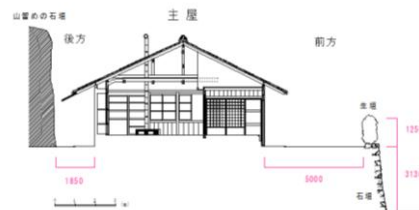


図10 石垣と生垣

楨垣は年に1回、家人により剪定されてきたが、高齢化による剪定の安易さや業者への委託の経済面から低くなる傾向がある。

これらの地域では、昭和30年頃の新築事例では、生垣を設けない屋敷が出現するようになる。しかし、昭和34年の伊勢湾台風で生垣の必要性を実感し、複数の地域で増設された例が確認された。このことから大災害により楨垣の防風効果が再確認され、復活する流れがあったことがわかる。

また、図11の家は楨垣を設けた以外に、敷地隅に台風時の避難用の家屋をコンクリートブロック造で増築している。

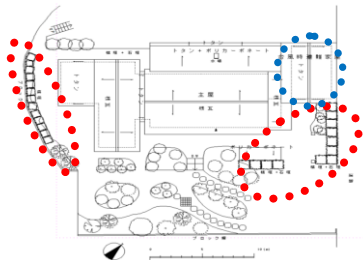


図11 台風後に設けられた楨垣と避難用家屋

敷地形態にも防風雨への対策がみられる。国府でも海岸に近い伝統的な敷地は道路から窪んで構成されている。これは海岸からの飛砂害や風害から家屋を守るためである。

しかし、排水上の問題から高低差を少なくするための土盛りが昭和20年代に流行し、掘り窪めた敷地形態も減少している。図12の家では60cm程上げられ、平成元年に新築された主屋は本二階建てになったので、家屋が楨垣より高くなっている。

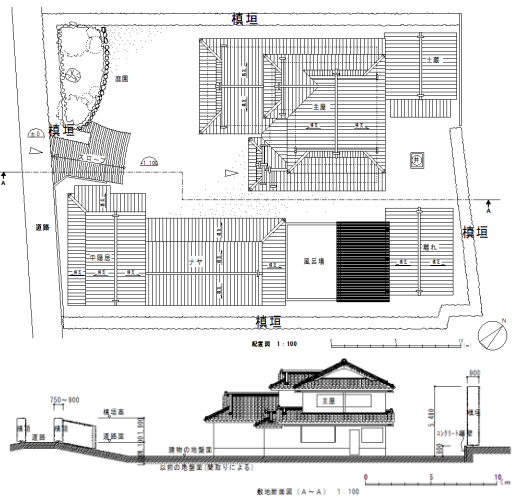


図12 掘り窪めた敷地断面図 (阿児町国府)

②家屋にみられる防風雨対策の特性と変容

外壁は降水により壁が洗い流されない板壁を用いるのもこれらの地域の特性であるが、軒先に防風雨のための板囲いを巡らす特

微的な対策がある。

平入り形式では、開口部の占める割合の高い平側の軒先に雨除け板が取り付けられる。切妻屋根では妻壁が大きく露出するために、降水が外壁にかかりにくいように、妻側にもガンギと呼ばれる雨除け板を破風下に垂らす。主屋以外に納屋や便所、風呂場にもみられる(写真5、6)。また、入母屋屋根は少数であるが、妻側の破風下の壁面を板で覆う対策が施されている。

これらの板囲いは、木材で作られていたが、昭和30年頃から板の上にトタンを張る、あるいはトタンに推移していく(写真7、8)。

現在では、ポリカーボネートの素材もみられる。ポリカーボネートは、腐朽しにくいだけでなく、透光性があることが用いられる要因である。

平側の雨除け板はガラス戸やアルミサッシ戸の普及により減少している。



写真5、6 木製の雨除け板



写真7、8 トタン製の雨除け板

山裾や山腹に屋敷が配置される場合は、敷地形態は横長となり、背後は土砂留めのための背の高い石垣やコンクリート塀が迫る敷地が多い。

これらの場合、主屋の屋根や庇、雨除け板を石垣の上に被せ、風雨の吹き込みを防止する対策が施されている屋敷構えがある。このような屋敷構えは、山深い紀伊山地の集落で多くみられる(図13)。

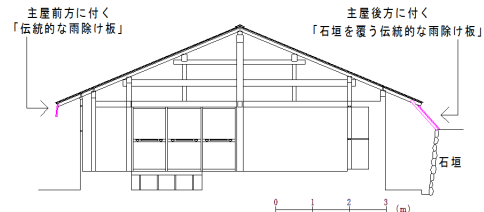


図13 雨除け板をもつ家屋の断面図

風雨から開口部を守る一般的な装置には雨戸があるが、調査地域では激しい風雨に耐えるために、2種類の装置がさらに施される。

ひとつは多量の降水の排水のために、雨戸敷居に排水口を空ける対策である。

他は、台風時に雨戸の脱落や飛散を防止するために雨戸の内外に嵌める門を受ける、門受けである。

門受けは、アルミサッシ戸が普及した30年程前から姿を消しているが、排水口はアルミサッシ製の雨戸敷居にも継承されており、その変容も一様ではない。



写真9、10 木製とアルミサッシ製敷居の排水口

今後は、研究蓄積の少ない三重県南東部と奈良県の調査事例を補充しながら、成果をまとめ、紀伊半島の民家の特性と変容の把握に努める計画である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①千森督子、熊野川上流域の民家における平面構成の特性と変容—田辺市本宮町—、民俗建築、第139号、pp.31~36、2011、査読無

②千森督子、北山川、熊野川流域の民家における平面構成の成立と変容、信愛紀要、第51号、pp.1~6、2011、査読無

③千森督子、谷直樹、熊野川、北山川流域の民家における平面構成の特性と変容に関する研究—田辺市本宮町、新宮市熊野川町、東牟婁郡北山村—、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp.361~364、2010、査読無

[学会発表] (計5件)

①千森督子、紀伊半島の民家における防風雨対策の特性と変容—南西部から東部地域—、日本民俗建築学会、2012年5月19日、宮城大学

②千森督子、谷直樹、東紀州の民家の平面構成の特性について、日本家政学会関西支部第33回(通算89回)、2011年10月15日、滋賀県立大学

③千森督子、谷直樹、熊野川、北山川流域の民家における平面構成の特性と変容に関する研究—田辺市本宮町、新宮市熊野川町、東牟婁郡北山村—、日本建築学会近畿支部研究発表会、2010年6月20日、大阪工業技術専門学校

④千森督子、熊野川上流域の民家における平面構成の特性と変容—田辺市本宮町—、日本民俗建築学会、2010年5月22日、北海道大

学

⑤千森督子、紀南の民家の平面構成の特性と変容—古座川町・那智勝浦町—、日本家政学会関西支部第31回(通算87回)、2009年10月18日、京都女子大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

講演

①千森督子、和歌山信愛女子短期大学公開講座「近世～近代建築に見るふるさと 和歌山県の古民家探訪」、2010年11月13日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千森 督子 (CHIMORI TOKUKO)

和歌山信愛女子短期大学・生活文化学科・教授

研究者番号: 40290449

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

谷 直樹 (TANI NAOKI)

大阪市立大学大学院・生活科学研究科・教授

研究者番号: 40159025